

学長挨拶

President's Message

岐阜大学は2020年4月に名古屋大学と法人統合を行い、国立大学法人東海国立大学機構を形成しました。管理・運営を行う一つの法人のもとに、教育・研究を行う岐阜大学と名古屋大学がぶら下がる格好で、私どもの正式名称は国立大学法人東海国立大学機構岐阜大学となります。また併存する機構直属の組織として、英語や数理データサイエンスなど主に共通教育を担当するアカデミック・セントラルと、生命科学*や航空宇宙生産技術**など最先端研究分野を担当する4拠点組織が置かれ、機構が最初の飛躍を遂げる起点となります。特にアカデミック・セントラルは、ポスト・コロナ時代の新しいハイブリッド型教育を開発し、実用化する拠点です。東海国立大学機構のミッション***は「国際的な競争力向上と地域創生への貢献を同時に達成する」ことであり、「勇気を持ってともに未来をつくる」人材を育成します。

さて岐阜大学そのものは1949年の創立ですが各学部は大変古い歴史を有し、教育学部は1873年、応用生物科学部は1923年まで遡ります。この間、受け継がれてきた大学のモットーは「人が育つ場所」、育成の目標は「学び究め貢献する」人材です。東海国立大学機構への法人統合後も前段のミッション***に立脚した上で、岐阜大学は「学び、究め、貢献する」「人が育つ場所」であり続ける、これが私どもの存在理念です。

岐阜大学が前記の2学部に加え、工学部、医学部、地域科学部の計5学部をもって現在のキャンパスに統合されたのは2004年医学部・附属病院の移転完成時です。さらに今年度新設した社会システム経営学環を加えた、6学部等、5つの大学院修士課程、1つの大学院専門職学位課程、2つの大学院博士課程と、2つの連合大学院、1つの共同大学院を持つ中規模総合大学として、「地域活性化の中核拠点であると同時に、強み・特色を有する分野で全国的、国際的な教育・研究の中核拠点」を形成して来ました。とくに尖端的特徴は生命科学、環境エネルギー、ものづくりにあり、東海国立大学機構の拠点(前述*、**)として岐阜大学の現キャンパスで継承されます。さらに「医学教育開発センター」は国内唯一の存在です。一方、地域活性化の拠点として県下28の自治体と連携協定を結び、「地(知)の拠点 Center of Community: COC」として展開する活動は全国のモデルです。各地域の課題解決に大学の知を結集して当たるとともに、そのような能力を有

する人材の育成、地元定着に取り組みます。加えて敷地内には岐阜市立岐阜薬科大学4-6年生校舎・研究施設が建設され、2015年4月には岐阜県防災・減災センターも開設、2017年には岐阜県中央家畜保健衛生所とインフラミュージアム、2018年にはスマート金型開発拠点が稼働を開始しました。さらに岐阜県食品科学研究所を2019年4月に開設、航空宇宙生産技術開発センターも2021年4月に本格運用を開始し、総合的な高等教育・研究の中心として一層の機能強化が図られます。なおキャンパス各施設の現状はこの概要の建物配置図(44-45ページ)でご覧になれます。自然豊かな郊外のワン・キャンパスで学習できるという環境は岐阜大学の誇りです。

私どもはこのようなバラエティに富む、かつ尖った分野で世界的な活躍を目指したい諸君、また東海地区・岐阜県の地元で定着し様々な領域で活躍を目指したい諸君の入学を期待します。緑あふれる豊かな環境のキャンパスで一緒に学びましょう。

なお、とくに都市部の大学では都心回帰が盛んなことは十分承知しています。岐阜大学についても多くの学生や職員から通学の不便さ(岐阜駅からオフアワーでも約30分)が指摘されています。このような動き、要望に対する私どもの対応は駅前サテライト・キャンパスの開設です。JR岐阜駅前の高層ビル「スカイウィング37」(37階建て)の東棟4階部分を借り切り、2012年10月に新しい教育セクションを設けました。IT設備も万全です。さらに岐阜大学のみが使用するのではなく、ネットワーク大学コンソーシアム岐阜に参画する23校(大学、短期大学、工業高等専門学校)との共同利用や、市民を対象としたセミナー、企業の催しについても、趣旨がサテライト・キャンパスの目的にそぐうものであれば受け入れ可能とし、実際、週末も含めかなりの使用実績を上げています。また本学名誉教授陣による「岐阜大学サテライト・キャンパス公開講座“アカデミッククラブ”」も2016年4月から一般市民向けに開講しています。このシリーズは学問・文化の香りが高い、市民に人気の公開講座に育ちました。

次に、これからの岐阜大学がどのような方向に進んで行くのか。私どもは「人が学び育つ場所」としてあるべく各学部、各教職員が懸命の努力を積み重ね、人材すなわち高度職業人をこれまで多数輩出してきました。最近では、文部科学省の「地(知)の拠点(Center of

Community; COC)」指定(前出)、その発展型であるCOC+事業の展開、両者の最優秀(S)評価獲得、南アジア地区における16大学からなる農学コンソーシアム(南アジア・コンソーシアム)結成、44大学からなる工学国際ネットワークの形成、「金型人材育成事業」、インフラ構造の維持管理にあたる「メンテナンス・エキスパート養成事業」、学校管理の高度専門機能を育成する「教職大学院」、さらに「救命救急ネットワーク構築事業」、「国際教養コース」開設など、地域活動から国際活動まで全国のモデルとなる大きな実績を上げています。これらをもって岐阜大学のプレゼンスを中部以外の地域や全国、また国際的に一層向上させ、学生諸君、保護者諸氏、地域住民の皆さん、広く納税者から、一層高い評価を頂戴できるよう率いるのが小生の責務と考えます。

また私どもはこれらの実績に大きな自信を抱いていますが、一方、私どもの教育、研究が地域の、全国の、さらには国際的な需要に合致するか否かを常に検証することの重要性も十分に理解しているつもりです。なかでも今後は特に大学のグローバル展開がきわめて大きな重要性を持ちます。これまで以上に相互の流れを大きくすること、外国人留学生を現在の400名からより多く受け入れることに加え、まず岐阜大学の学生が海外へ出かけ、その地における様々な需要(課題)を把握し、岐阜大学でそれを解決する研究・学習を遂行する、その回答を持って真の海外貢献を行う、これが私どもの目標です。この目的で2019年には海外の大学と協働でジョイント・ディグリー・コースが一気に4本立上りました。このように地域に根ざした国際化を展開し、その成果を国内外の地域に還元する「グローバル」なサービスを大学が行うことが重要です。また同様のアプローチを国内の様々な地域貢献についても行う、すなわちCOC事業、COC+事業の神髄はここにあると考えます。

世にいう学長のガバナンスはこれらを実現させるためのシンクタンク機能を形成し、それを指導する能力であり提案する能力と捉えています。大学のグローバル化はその実現経路上に予測でき、行き届いた視野を持つことにより現出するものと考えます。広く皆さんとともに進んで参ります。

岐阜大学長 森脇 久隆

Contents

学長挨拶	01
岐阜大学の理念と目標	02
岐阜大学憲章	03
岐阜大学の教育における3つの方針	04
環境への取り組み	05
大学組織	06
教育研究組織	07

教育 学ぶ岐阜大学

教育推進・学生支援機構	14
学生数	16
入学状況	18
学部卒業生数・進路状況	19
国家試験合格状況・教員採用状況	20
大学院修了者数・進路状況	21
学生支援施設	23
学生サークル活動	24

研究 究める岐阜大学

学術研究・産学官連携推進本部	25
特色ある研究の取り組み	26
科学研究費助成事業	28
共同研究・受託研究	29
発明届	29

社会連携 貢献する岐阜大学

地域連携	30
公開講座・シンポジウム・フォーラム	31
市民大学講座	31
高大連携	31

国際交流

グローバル推進機構	32
留学生受入・派遣状況	33
学術交流協定締結大学等一覧	35
研究者受入・派遣状況	37
国際交流会館	37
海外オフィス	37

組織

学長・副学長等一覧	38
構成員数	40
予算	41
寄附金	41
沿革	42
歴代学長	43

キャンパス

建物配置図	44
土地・建物	46
所在地・交通案内	48